

光永覚道『千日回峰行』春秋社

にいぜき
新関伸也

「回峰行」は「比叡山において、一日に山中を一周し、合計千日これを行う修行。平安中期より始まるという。千日回峰行」（広辞苑）とある。この「千日回峰行」を終えて阿闍梨あじやりとなった光永覚道氏が自らの生い立ちと比叡山での修行の日々、そして十二年籠山行ろうざんぎやう満行に至るまでの経緯をインタビューに答える形式でまとめられた本書は、平成八年（一九九六）に発行されている。その後、修行を終えて山を下り、「南善坊」住職となった平成十六年（二〇〇四）に増補新装された。著書の構成は、第一章「比叡の四季」、第二章「出家―生い立ちから回峰行入行まで」、第三章「回峰行とは」、第四章「菩提を求めて―千日回峰行Ⅰ」、第五章「人々の祈願とともに―千日回峰行Ⅱ」、第六章「回峰行を生きる」からなる。

「千日回峰行」なるものを少し詳しく述べてみたい。この行は、読んで字のごとく、山の峰や谷を歩き回る仏教修行のひとつである。平安時代に最澄の弟子に当たる無動寺谷を開いた相応和尚が始め、のちに室町時代の相實和尚によって、行のかたちができあがったという。千年以上を経た今日まで、天台宗で綿々と受け継がれてきている荒行である。回峰行は、比叡山無動寺での勤行の後、深夜二時に出発して東塔、西塔、横川、日吉大社を経ながら、道のり七里半（三十キロ）、真言を唱えながら二百六十数カ所の諸堂・霊跡を約六時間かけて巡拝する。この行を一〜三年目で連続百日、四、五年目は連続二百日、そして千日に達すると「千日回峰行」満行となる。最短でも、始めてから七年はかかり、途中で断念することは許されない。回峰行の断念は死を意味するため自害のための短刀を常に身に付ける。覚道氏は、昭和五十年に二十歳で得度してから小僧として三年、籠山三年を経て、平成二年の三十六歳で満行している。

一方、七百日が終わると十月から、明王堂参籠という、最も厳しい「堂入り」が始まる。明王堂で不動明王の前に座して一日三座のお勤めと十万遍の真言を唱えながら、九日間「断食、断水、不眠、不臥」の四無行を行う。その間、堂の外に出るのは、不動明王に水を供えるために深夜二時にあか関伽井に行くのみである。この水すら飲むことは許されてはいない。一口も食わず、寝ず、経を唱えるため、肉体は限界を迎え、一週間もすると死臭がし、瞳孔がひらいてくるという。この「堂入り」を終えると「当行満」と言われ「阿闍梨」と称せられて、多くの信者に迎えられる。さらに、六年目には京都の赤山禅院への往復、一日十五里（六十キロ）百日間が加わり、七年目に全行程二十一里（八十四キロ）に及ぶ「京都大廻り」百日が加わる。これらを終えて満行者となり京都御所にわ

らじ履きのまま土足参内して、玉体の加持祈祷が許される。

また無動寺谷明王堂輪番に当たると百日間の五穀断ちののち、自ら発願して七日間の断食・断水で十万枚護摩供を行うのである。これらを全て終えた者は、「大満行大阿闍梨」と称され、「十二年籠山行満行」となる。覚道氏は平成八年、四十二歳で満行した、その時点で本書は増補されている。

著書を読む限り、他者からみれば苦行と思われる回峰行や堂入りの体験を淡々と述べる口調が特に印象的である。つらい苦行に耐えに耐えて自らを限界まで追い込んだ高みにある人物というよりも、「行をさせていただいて有り難い」と謙虚に話す姿がすがすがしい。二十歳そこそこで入山を決め、俗世から隔絶した仏門に入る苦悩は、伝わってこないところが不思議である。「ちよつと比叡山に行ってくるから、しばらく会えないよ。では、また」という感じである。本人いわく、入山して小僧になったとき、回峰行すら知らず。挙げ句の果て「比叡山が天台宗ということさえ知らなかった。何も知らなかった」といつている。この無知さが偉業を成し遂げた原点になっているのかもしれない。下手に知っていることがないから、目前の行いを日々遂行できたのであり、そのことが強みになったはずである。回峰行は、どんなに体調不良でも多少のけがでも休まない、休めない決まりがある。自己都合で休むことは行の断念に当たり、死を賭して発願したからには、許されるものではないという。覚道氏は、むち打ちによるヘルニアや膝痛の持病を抱えつつ痛みをこらえて、ひたすら歩き続けたという。

また、「堂入り」の場面も圧巻である。百日間かけて食べる量を徐々に減らして、最後には一日一勺の粥で胃を徹底的に小さくして、断食に入るのである。不思議なことに九日間は、それほど眠くはならず、頭だけがさえて来るといふ。なぜなら、血液が消化に回らず、脳にだけ上がってくるためらしい。そして、断食、不眠を続けていくとやがて外気は寒くても身体がほてり、薄着で十分になるという。それは生命機能を維持するために体内の細胞に貯えられた脂肪や栄養分を燃やしているためであろう。身は痩せ細ることを想定して二回りも小さな白装束が着せられる。様々な「堂入り」にまつわる儀式の経験知は、先達阿闍梨からあとを継ぐ者に伝承されていく。そして、命を賭けるこの仏教儀式は、釈迦が悟りを求めて苦行していた姿であり、人間のあらゆる欲求を消滅させていく姿でもある。

さて、この超人的な修行を積み重ねた大阿闍梨、光永覚道とは、どのような人物なのであろうか。読み進めると、昭和二十九年十一月生まれ、現在六十六歳。山形市出身で、山形五中から鶴岡工業高等専門学校を卒業したことがわかる。本名は「晃」。父は大学職員で三人兄弟の三男で、長兄は宮城高専の教授、次兄は横浜の運輸省勤めの国家公務員。祖父は小学校長をつとめたという。

ここまで読んで、生年と学歴からして、もしかして、私の兄と高専で同級ではないかと気づいたのである。私の兄も昭和二十九年生まれ、天童二中から鶴岡工業高等専門学校機械科に進学している。となれば鶴高専の五年間、さらに全寮制の三年間は共に過ごしていたはずだ。著書には、光永

覚道とあり、本名はフルネームでもどこにも書いてはいない。さっそく英国の兄に電話して「鶴高専の頃、バイクが好きで山形市出身の同級生に晃という名前の人知らないか」と訪ねると、本名「丹野晃」であることが分かった。やはり同級生だったのである。私の兄によると同じクラスではなかったが、覚えているという。しかし、比叡山の太阿闍梨となったことは、全く知らなかったようだ。

著書で鶴高専時代のことを覚道氏は「高専に入ったとき、自分の人生のレベルが完全に敷けたんです。高専に入った時点で、周りの同級生のレベル、友達で大学に行ったレベル、自分が会社に入ったときのポストまで全部予想できたんです。人生の先読みが完全に出来たんです。自分の一生のレベルを完全に引けたんです」と語る。私の兄直也も昔、先が見えた人生から逸脱したルートをとどっている。卒業前の五年生で課せられた工場実習を体験してから、「大卒の下で工場勤めをして、定年まで現場のエンジニアで終わるから、就職せずコンピュータの専門学校に行く」と言い出し、母を困惑させたことを思い出す。そうなった理由に「長距離列車で乗り合わせたとある人に、これからはコンピュータの時代が来る」と話を聞いたことが契機らしい。昭和五十年、すぐに就職せず、昼は、互助会の営業の仕事をしつつ、武蔵小杉の「富士通電算機学校」の夜学に通っている。会社にコンピュータプログラマーが必要となってきた時代である。その後、システムエンジニアとして「トツパンムーア」に就職し渡英、現地で「NEC」に転職、最後は「野村総合研究所ヨーロッパ支店」で定年を迎えた。現在は、英国の南にあるプールという町で、日本の会社の顧問をしなが

ら余生を送っている。覚道氏と私の兄をみても、高専は高度経済成長期に工業技術者養成の急務によって設置された高等職業学校であったこともあり、中間技術者として、七十年代の時点で人生設計も予測がつきやすかったことは確かであろう。

さて、覚道氏に話は戻るが、高専卒業後、就職せず、二十歳から師僧の光永澄道氏に誘われるまま、すぐに比叡山で得度して、修行の日々を始めている。入山した動機もある意味、偶然の巡り合わせが重なっている。最初から僧侶になる予定では、全くなかったらしい。高専の三年生の頃、京都の庭園を見るために連泊できる宿としてお金のかからない比叡山の寺に泊まっていたところ、たまたま澄道氏に誘われて一泊したのが無動寺谷法曼院であった。宿賃のかわり小僧のまねごとをして、「こんなところはたまらない」と帰郷しているが、なぜか翌年の四年生の夏休みからは、幾度か比叡山を訪ねている。そして、高専から山形の実家に帰っているときに、澄道氏の弟子にならないかと人伝に話があり、先に見える会社勤めではなく、先が見えなくて面白いと思った仏門に飛び込んでいく。両親も何も言わずに送り出しているところも、丹野家のすごさである。「予測のつかない人生にひかれてしまった」と覚道氏はいう。何事もマイペースで、集団が苦手、友達よりも釣りが好きで、そのためにバイクを買って乗り回していた高専時代。エンジニアとなって働く自分の人生を瞬時に回避したのも、仏縁とでも言うべきものであろう。

それにしても、さしたる動機や決意もなく入山した当時の青年丹野晃氏は、大阿闍梨光永覚道と

して、南善坊を再興し、衆生の加持祈禱を行う人生になるとは、予想できなかったはずである。これも、たまたま京都を訪ねて比叡山で光永澄道氏に巡り合わなければ、別の人生を歩んでいたことだろう。高専を卒業して、会社に勤め、先の見えたルートに乗っていたとしたら、どのような人生を送っていたのだろうか。一方、私の兄もたまたま隣り合わせた人から、「コンピュータ時代が来る」という話を聞かなければ、システムエンジニアになることもなく、また現在の英国暮らしもなかったはずである。

人生とは不思議なものである。ある人との出会いで、ころっとその後の生き方が変わってしまうのである。

「縁」とは、そういうものであり、運命でもある。



春秋社(2004)